

テーマ 終末期在宅ケアにおける訪問音楽療法の意義についての研究

申請者名 矢津 剛

所属機関 (医) 矢津内科消化器科クリニック

職 名 理事長・院長

所属機関所在地 行橋市行事 7 丁目 19 6

電話番号 0930 22 2524

提出年月日 平成 16 年 10 月 29 日

勇美記念財団研究報告書

(はじめに)

当クリニックでは、QOLの向上の一環で、筋萎縮性側索硬化症(以後ALS)の方を対象とした、音楽療法の導入を試みている。

近年の音楽療法の研究報告においても、ALS患者における事例報告が散見されるようになり、今後、その有用性が着目される。

しかし、ALSは、その症状の進行の特徴から、発語、発声が困難になる方は多く、そうした方々と音楽療法セッションを行う中で、ご本人の意思を感じ取ることが困難な場合がある事も否定できない。また、ご本人の意思に関しては音楽療法のみにとどまらず。医師、看護師の活動において、御家族との日常においても共通する問題と言える。

ご本人の意思を理解し、コミュニケーションをどの様にとって行くか、考え、模索していく事は、ご本人、御家族のQOLに大きくかかわってくることがいえる。

(研究目的)

脳波スイッチMCTOSは、肢体に重い障害がある方が、手足を用いず、機器操作を行う事が出来る意思伝達装置で、今回ALS患者への適用を目指すべく、当クリニックで、MCTOSの使用条件に該当される方に対し、試験的に導入した。

本研究は、MCTOSが、ALSなど、肢体に重い障害があり、言語的コミュニケーションも困難な中で療養生活を送られている方に対し、脳波スイッチMCTOSを使用し、その効果より、コミュニケーション手段の一つとしての有効性を見出す事を目的とした。

(意思伝達装置 MCTOSについて)

MCTOSは、指、手、足などを全く使わない操作方法のため、言語的コミュニケーションが困難で、肢体に重い障害を持たれている方に対し、機器操作の可能となる装置。

使用できる条件として、以下の4項目が挙げられる。

1. 意識がはっきりしていること
2. 意思があること
3. 耳が聞こえること
4. 心身が冷静であること

MCTOSで利用する生体信号は、筋電信号、眼球インパルス、脳波の3種類ある。

脳波のベータ波を利用し、信号を発生させる場合、意図的に信号を発信させるためにトレーニングが必要な場合もあり、使えるようになるには、個人差がある。

(方法)

期間 平成16年4月~10月

上記期間中に対象となる方一名に対し、MCTOSの説明、承諾を得て、導入する。

操作は、訪問看護師が訪問している際、音楽療法士1名が同行し、毎回簡潔な質問を行い、トレーニングをする中での発信状況を記録する。

発信状況については、発信あり/なしについて、また、質問した内容について記述した。

MCTOS の操作には、音楽療法士以外に看護師等も関わった。

(対象)

ALS 患者 1 名。

MCTOS について、ご本人、御家族に主治医、看護師より説明あり、8 月下旬より導入、トレーニングを試みる。

(結果・考察)

MCTOS の使用状況を以下に示す。

訪問回数は、MCTOS 導入後の訪問回数を記した。

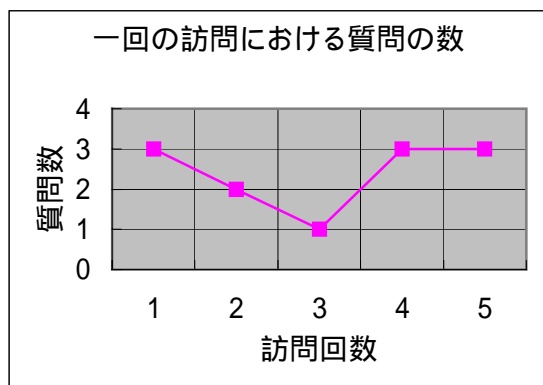
各訪問時の質問回数を資料 1 に示す。

MCTOS は、意識的に生体信号を発生させる為、装着時の精神的な状態によって、発信状況が異なってくるのが推測できる。

その為、質問内容は簡潔、理解しやすい単純な内容を心がけた。

また、長い時間の装着は、疲労につながるため、一回の装着時間を 5 ~ 10 分とし、その中で質問を行った。一回の訪問における平均の質問数は、2 . 4 回であった。

資料 1



次に質問の主な内容と発信状況について下記表に示す。

訪問回数	質問内容	発信あり	発信なし
1	マクトス装着時の不快感について		
2	(マクトスを装着した後) 「少しお話しても良いですか?」		
3	(マクトス着用せず)		
4	「リラックス出来ますか?」		
	「発信させる時は頭で強くウって思 ってみてください」		
5	(音楽について)(特定の曲を示す) 「この歌、聴きたいですか?」		

MCTOS 装着一回目は、対象者にとって、初めてということもあり、戸惑い、なれない点もあったため、質問に対する発信状況に一致性が観察できなかった事がいえる。

2回目以降では、徐々になれてきた様子が伺え、装着時に「少しお話しても良いですか？」と尋ねると、発信あり、同時に瞬きもされた。

3回目は、訪問時より、入眠傾向にあった為、使用を控えた。4回目では、MCTOS の操作確認の為、改めて、リラックス状態の脳波と発信をしていただいた。

5回目では、音楽の導入についての質問を行った。笑顔や瞬きは盛んであったものの、発信はなかった。

MCTOS は、脳波等を利用し、発信ランプを点灯させ、点灯したか、しなかったかで質問に対する返答「はい」「いいえ」をよみとるため、質問の内容が限られてくる。

本事例の場合、5回目の装着時のように、発信が全くないにもかかわらず、表情を通して対象者の意思やその時々反応を理解する事もあり、表情などのノンバーバル情報もコミュニケーションをとる上で重要となってくる。

MCTOS でよみとる事が出来る対象者の意思に加え、表情なども併せていく事で、コミュニケーションの拡大につながる事が示唆される。

しかしながら前述したように、MCTOS の使用においては、個人差があり、すぐに使用できる方もいれば、数ヶ月トレーニングが必要な方もおられる。今回時間的にみて十分なデータを収集できたとはいえ、今後も継続し、データを収集していく必要性があると考え

(おわりに)

MCTOS の装着により、ノンバーバル情報と併せることで、対象者意思伝達の可能性が示唆された。今後も継続してデータの収集を行っていき、ALS 等の疾患で、意思伝達が困難になられた方の、コミュニケーションツールの探求に努めたい。